

一方、将校は最後の準備にとりかかっていた。地面にしっかりとつけられた機械の下にもぐったり、梯子に登って、上の部分を調べたりした。

機械工にでもまかせればいいことだったが、将校自らが熱心に取り組んでいた。それはこの機械に思い入れがあるからかもしれないし、何か他の人にはまかせられない理由でもあるのかもしれない。

「準備完了！」

そう言つて将校は、ようやく梯子を下りてきた。ひどく疲れた様子で、口を大きく開けて息をついた。薄い婦人用のハンカチを二枚、軍服の衿と首の間に押し込む。

「その軍服、この熱帯ではおつらいでしょうね。」

旅人が言った。将校は機械のことを聞いてくれると思つていたのだが、

「いかにも。」

そう返すと、将校は手についた油やグリスを、用意しておいたバケツの水で洗い落として、すぐに言葉を付け加える。

「しかし、この軍服は祖国も同様。祖国を失いたくはありませんので。さあ、ぜひ、この機械をご覧ください。」

手を布でぬぐいながら、機械の方を示した。

「手がかかるのはここまでで、あとはみんなこの機械がひとりでやってくれます。」

旅人はうなずいて、将校の後ろにつづいた。

将校は、何も問題が起らないよう念入りに機械を点検する。

「もちろん故障もします。今日は起こってほしくありませんが、それでも備えは必要です。この機械は、連続十二時間動作しつづけてくれないと困るんです。たとえ故障が起こったとしても、たいていはささいなことで、すぐ修理できるのですけどね。」

そこまで言つと、将校が「お掛けください。」と、積み上げられた籐椅子の山から、ひとつ引き出して、旅人の前に置いた。

旅人は断りきれず、しぶしぶ坐った。

ちょうど前に穴のあるところで、何となく目をそちらに向けた。それほど深くない穴で、掘り出された土がそばに積み上げられてあった。その穴を挟んだちょうど向かいに、機械が設置されていた。

「この機械のことは、もう司令官からお聞きになりましたか？」

旅人は曖昧に手を振った。

将校はそれ以上訊ねようとせず、自分で機械のことを説明し始めた。

「この機械は――」